

アメリカ南部英語の vernacularism

平野 信行

I

アメリカ南部作家の作品にみられる特色として、作品の舞台ないし背景となっている土地に特徴的な風物や方言をおおいに取り入れて、独特の雰囲気を作り出している点を挙げることができる。もとより、作家が、自分の生まれ育った土地の風土的特色を作品に取り入れて、独自の世界を構築しているのは、南部作家に限ったことではないから、ことさら南部のみを云々することは当を得ないかもしれない。しかし、たとえば、ニュー・イングランド、中西部あるいは西部を舞台にした作品と、南部を背景にした作品を読み比べてみると、後者には、南部性ともいべき地域的特性がより濃厚に映し出されているように思われる。この主な理由として、南部には早くから黒人が奴隷として存在し、出自を異にする彼らの独特の風習、言語等が、他の地域にはみられない南部を創り出したと、考えることができるであろう。

ある土地に独自の言葉で表現することを vernacularism というが、本稿では、南部文学初期の作品をいくつか取り上げて、南部英語の vernacularism の特質を探ってみようと思う。急いで付け加えねばならないが、南部文学初期といっても、この時期を確定することは、じつはそう容易ではないのである。それは、南部文学の「文学」とは何ぞや、という大きな問題が存在するからであり、この規定の仕方如何で、「初期」の幅が変わるからである。たとえば、現在のヴァージニア州ジェイムズタウンに植民が行なわれた頃の日誌、手記等、いわゆる記録の時代にまで遡るとすれば、1608年にヴァージニア植民の指導者ジョン・スミスが著した *A True Relation of such occurrences and accidents of noate as hath hapned in Virginia since the first planting of that colony* から始めねばならないであろうが、今日われわれのいう、詩・小説などの純

文学の作品に限定するのであれば、19世紀初期1820年代ないし1830年代を南部文学の誕生期とするのが妥当であろう。すなわち、ウィリアム・ギルモア・シムズ、ジョン・ペンドルトン・ケネディ、ジョージ・タッカー等が作家活動を始めた時期である。⁽¹⁾本稿で南部文学初期という場合は後者の規定に従うことにする。

上に例示した作家は、ウォルター・スコット、ジェイムズ・フェニモア・クーパー、ワシントン・アーヴィング等の影響を受け、いわゆるロマンス小説を書いた。これら南部作家の活動の背景となっていたのは、棉花栽培を中心とする大農園を経営していた南部貴族の世界であった。⁽²⁾この世界は、頂点に農園主を据え、底辺には黒人奴隷やブアホワイトが貧しい生活を余儀なくされていた、強固な階級社会であった。しかも、農園主が自分の農園を直接管理することはほとんどなく、大部分は、都市に別邸を持って、さまざまな仕事に従事し、農園の管理は部下に任せていたというのが実態であった。このような余裕ある生活の一部に読書があり、その際彼らが好んで読んだのが、スコットのロマンス小説であった。それは、当時の南部貴族が、中世ヨーロッパ封建時代の騎士道精神や宮廷恋愛を理想としていたからである。こうした貴族を主な読者として持つ作家がロマンス小説を書いたのは当然といっていよいであろう。

大農園制度が継続し、南部社会のピラミッド構造が確固としている限りは、南部作家の創作基盤はしっかりしていたが、やがて、1861年に南北戦争が勃発し、1865年に南部の敗北でそれが終結したことにより、農園制度は崩壊し、農園主の南部貴族は没落の一途を辿ることになる。彼らおよびその子孫の運命は、現代の南部作家、とりわけウィリアム・フォークナーの諸作品に描き出されているが、そこには、彼らがかつて保持していた生活の余裕はほとんどみられない。読書を楽しむなどという精神的ゆとりは失なわれたであろう。このことは、ロマンス小説に対する関心の消滅を意味したから、初期の南部作家にとっては、読者を失うことにより、創作の支えが外れる結果となった。事実、南北戦争後いわゆる南部再建期にかけては、文学作品として取り上げるに値するものはほとんど見当たらないのが実状である。1870年代には、南部文学は死滅したとするポール・ハミルトン・ヘインのような人物が現われるまでに到った。しかしながら、南北戦争から南部再建期にかけての、表面的には文学の低迷期にあっても、南部文学の伝統は脈々と息づいていた。その証拠に、再建時代が過ぎ、1880年代になると、若い作家が次々と現われるのである。彼らは、幼い頃に農園生活を送った記憶を持ち、南北戦争でそれが崩れ去るのを経験している。いわば、南北戦争による南部社会のピラミッド構造崩壊を創作のバネとして、新しい世代の作家は彼ら独自の世界を切り拓いていったといえるであろう。

南北戦争後に登場した作家たちの作品にみられる大きな特色は、シムズ、ケネディ等の先輩作家以上に、彼らの生まれ育った土地に特有の事物、なかでも地域の方言をそのままの形で取り入れていることであり、そのなかでは、黒人の言葉が重要な位置を占めていたのである。今日われわれが現代南部作家の作品に見出す vernacularism の基礎がこの時期に築かれたといつてよいであろう。それでは、彼らは、先輩作家の vernacularism をいかに受け継ぎ、彼ら独自のものを創り出したのであろうか。旧世代の作家の代表としてウィリアム・ギルモア・シムズを、新世代からはトマス・ネルソン・ページを選んで、彼らの作品のいくつかについて検討してみよう。

II

サウス・カロライナ州チャールストン出身のシムズは、ロマンス小説を約20篇残しており、そのなかに、歴史ロマンスとでも称すべき作品が数篇ある。彼が歴史を扱う場合、しばしば、時代を植民地時代に設定し、その時期における白人入植者とインディアンとの抗争を好んで題材にするのであるが、今日彼の代表作と評価される *The Yemassee* (『イエマシー族』) (1845) もその例である。

この作品は、1715年4月にサウス・カロライナ州ポコタリーゴ (Pocotaligo) で、白人入植者が、贈物と交換にインディアンの土地を要求したことに端を発した争いに題材をとり、ロマンス小説に欠くことのできない要素として、牧師の娘ベスと、植民地防衛のリーダーであるハリソン、それに恋敵のチャーリーとの間の恋愛関係を織り込みながら描いているものであるが、この種の作品における vernacularism の要素として何が考えられるであろうか。

まず第一に、イエマシー族インディアンの言葉であろう。彼らはもともとポコタリーゴの土着の民であるから、vernacularism として取り上げるとすれば、彼らを真先に対象とすべきである。しかし、次に示す引用例のように、インディアンの vernacularism は作品中にはほとんど無いのである。

“That’s the way, chief, to deal with the enemy. But we are no enemies of yours, and have had fun enough.”

“It is fun for our white brother,” was the stern and dry response.

“Ay, what else — devilish good fun, I say — though, to be sure, you did not seem to think so. But I suppose I am to have the prisoners.”

"If our brother asks with his tongue, we say no—if he asks with his teeth, we
⁽⁴⁾
 say yes."

これは戦闘で捕えられたイエマシー族インディアンの一人イシアガスカ (Ishiagaska) と、彼を捕えた白人チャーリーとの対話であるが、our white brother といった表現がなければ、これを二人の白人の対話といっても、あるいはそう思えるかもしれない。じっさいの事件で、このような場合、どのような形で対話が行なわれたのか、残念ながら、われわれは知り得ないが、1710年にはじめてノース・カロライナ知事が任命されて、カロライナが北と南にわかれたという歴史的経緯を考えると、インディアンと白人が話す場合には、通訳が間に立ったと解釈するのが自然であって、この引用の場面でも、イシアガスカは部族の言葉で、チャーリーは彼の国語で、それぞれ話したのでなかろうか。厳密な意味での vernacularism をこの場面に用いるのであれば、当然インディアンの言葉をそのまま文章にすべきである。しかしながら、少数の例外はあるものの、作者は、作品全体を通じてそのような vernacularism を用いていない。インディアンが broken English で語ったとあっても、書かれている英語は、見事に正統的な英語なのである。

つぎに vernacularism の対象として考えられるのは黒人の言葉である。この時代には黒人奴隷が存在していたし、ポコタリーゴの白人のなかには、黒人奴隷を所有している者が少なからずあったはずである。事実、作品のなかには、ハリソンの奴隷としてヘクターという黒人が登場する。彼の場合 vernacularism はどのように扱われているだろうか。一部を引用してみよう。

[A] "Now, go wid you, Dugdale ; be off, da's a good dog, and look out for your maussa. Dis he track — hark — hark — hark, dog — dis de track ob he critter. Nose'em, old boy — nose'em well. Make yourself good nigger, for you hab blessed maussa. Soon you go now, better for bote. Hark'em, boy, hark'em, and hole'em fast."⁽⁵⁾

[B] "Hector — thou hast saved my life," said Harrison, as he came up to him.

"I berry glad maussa," was the natural reply."⁽⁶⁾

[A]は、インディアンに捕えられた主人ハリソン救出のために猟犬を放とうと、犬

に語りかけているヘクターの言葉、[B]は、無事救出されたハリソンとヘクターの対話であるが、この二つの引用を先のイシアガスカとチョーリーの対話と比較してみるならば、両者の差は明白である。インディアンの場合には、彼の部族語そのものはまったくなくない。これに対し、ヘクターの言葉は vernacular そのもの、おそらく、当時ポコタリーゴ周辺の黒人がじっさい日常生活で用いていた言語であろう。しかも、この引用にみられる黒人の英語には、現代南部作家の作品に登場する黒人の用いる英語に共通する特色⁽⁷⁾が出ていていることは、きわめて注目に値する。たとえば、the→de, with→wid, very→berry, have→hab などがそれである。

ところで、サウス・カロライナ州の vernacular といえば、ガラー語⁽⁸⁾ (Gullah) の存在を忘れることができない。この言葉は、クリオール語 (Creole) に属し、サウス・カロライナ州およびジョージア州の大西洋沿岸あるいは沖合の島に住む黒人の言葉で、これには、アフリカ諸語の特徴に通じるものが含まれており、黒人英語の起源を探るうえで重要視されている。『イエマシー族』の舞台となったポコタリーゴは、大西洋岸から約60キロ内陸にあるから、沿岸とはいいいにくい。したがって、vernacular としてのガラー語との関係は薄いかもしれない。しかし、作者シムズが、チャールストンという、まさに沿岸都市の出身であることを考慮に入れるならば、彼がこの町でガラー語を話す黒人に会った可能性があるし、それを自作に用いているという考え方もできる。つまり、黒人奴隷ヘクターの英語にガラー語の特色がみられはしないかということである。二、三の実例について比較してみよう。

[A] Looky heah, looky heah. I kin show all dese heah (lifts pants leg to reveal shackle scars.) I wasn' no Uncle Chaalie, tho'. Ain' gonna be none uh dat. I radduh, I radduh all dis leg go. See... shackle weah dat out, shackle weah dis out. Guard shoot me by duh head, try to get away. Evytime a slow train come in I try to ketch im, I have shackle on, but I try to ketch im, I wudden give up! ...⁽⁹⁾

[B] An I woiked wit croakuh suit on ... my mudduh an fadduh din have no money. I have croakuh. Dah make duh croakuh pans, duh croakuh coat. If I wanna play I have to play in dat croakuh pans ... You see dis bag? Is sack. I weh it.⁽¹⁰⁾

[C] We doan nevuh wuk wen wintuh comes. We nevuh come out in wintuh-taam. (So where would the food come from?) Come fum ow gaaden, my

Daddy, we raise evyting. We raise rice, cawn, an de cawn bring you grits an flowuh an cawnmeal, des right. Hocks go anyway you wants em to go. An das tree paat right deh ... Din you go to duh creek and den you get plenty fish an you cawn dem an you put it to dry an wen deh done dry yuh out it in a barrel, den you have you fish, den yuh have yuh fish. ...⁽¹¹⁾

ここに引用した三例は、いずれも、サウス・カロライナ州沖合の大西洋に浮ぶジョン島出身の老人が、インタビューに答えて、昔の生活を語っているところで、[A]と[B]は、奴隷として辛酸を嘗めた後、黒人の地位向上運動グループ COBRA(The Committee for Better Racial Assurance)に参加して、何度も投獄されながら、いまなお公民権獲得に熱意を燃やしているギニーという男性、[C]は、ギニーとはまったく異なり、自営農民の娘として生まれ育ったアリス・ワインという女性が、それぞれの語り手である。ここにみられる英語をヘクターのそれと比較してみると、共通するところもあるが、異なる個所のほうがはるかに多いことに気付く。ヘクターの英語は他にもいくつかあるのだが、それらとギニーおよびアリスの英語とつきあわせてみても、同様のことがいえるのである。⁽¹²⁾ ということは、『イエマシー族』における黒人英語の vernacularism はガラー語とは関係が薄いという結論になるであろう。おそらく、作者は、自分の生まれ育ったチャールストンの vernacular よりも、作品の背景となる土地、すなわち、ポコタリーゴの言葉を重視したのではないと思われる。シムズは、『イエマシー族』から10年後の1845年に、*Wigwam and the Cabin* (『インディアン小屋と黒人小屋』)という、アメリカ革命後のカロライナに題材を求めた短篇集を発表したが、このなかにみられる vernacular にそのことが裏付けられるのである。たとえば、冒頭の作品 ‘Grayling ; or, “Murder will out”’ (『グレイリング、『殺しはばれるぞ』) につぎのような対話がある。

“I’ve hearn tell ob that other settlement, but I never know’d as any of the men fou’t with us. What giniral did you fight under? What Carolina giniral?
“I was at Gum Swamp when General Gates was defeated ;” was still the hesitating reply of the other.
“Well, I thank God, I warn’t there, though I reckon things wouldn’t ha’turned out quite so bad ; if there had been a leetle sprinkling of Sumter’s or Picken’s, or Marion’s men, among them two-legged critters that run that day. They did

tell that some of the regiments went off without even emptying their rifles.
Now, stranger, I hope you warn't among them fellers.

"I was not," said the other, with something more of promptness.⁽¹³⁾

ここにみられるカロライナの vernacular には、ヘクターの英語と共通する語法が散見されるが、異なる部分がより多く、先のガラー語と比べてみると、異なる個所はさらに多い。これは、作者がそれぞれの作品の背景の土地の vernacular を重視していることの現われであろう。

III

トマス・ネルソン・ペイジは、1853年にヴァージニア州東部のハノーヴァー郡に生まれ、ワシントン・リー校 (Washington and Lee) に学び、そこで校内文芸誌の編集を手がけ、ヴァージニア大学で法律を学んだ。卒業後リッチモンドで弁護士となった。その後、1884年に『センチュリー』誌に最初の作品 'Marse Chan' (「マース・チャン」) を発表した。1887年には、この作品をはじめ、ヴァージニア州東部を舞台とする短篇集 *In Ole Virginia* (「古きヴァージニアにて」) を公けにした。この著作は六つの短篇から成っているが、そのうち五つが土地の黒人方言で語られており、地方色豊かな作品である。ペイジの作品における vernacularism を考えるのに格好の材料であるので、この作品について彼の vernacularism を検討してみよう。

「マース・チャン」は、作者がヴァージニア州東部の田舎でふと出会った黒人から聞いた話である。彼の話の中にマース・チャンという名前が出てきたので、興味を持った作者が彼にたずね、それに答えて、その黒人(名前をサムという)がマース・チャンと自分との間のさまざまな出来事を語るという体裁になっている。ところで、marse は master のことであり、黒人が主人を呼ぶときの呼称である。この語には、marse, mass, massa, maussa, masteh, mastuh など、さまざまなスペリングがある。『イエマシー族』でヘクターが主人のハリソンに話しかけると、あるいは言及するときには、すべて maussa であるが、これはあまり多い用法とはいえない。たとえば、同じ作者の *Woodcraft* (『森の知恵』) (1856) には、maussa とならんで mass が何回か出てくる。これに対して marse は頻繁に用いられる。ひとりヴァージニア州にとどまらず、ジョージア州、ミシシッピ州、アラバマ州など、広く南部に行き渡っているといつてよい。

作者がサムに会ったとき、彼は主人の飼犬を探していた。主人の名がマース・チャンだということで、二人の間に問答が交わされるのであるが、そのときの様子を作者は次のように描いている。

"Who is Marse Chan?" I asked; "and whose place is that over there, and the one a mile or two back—the place with the big gate and the carved stone pillars?"

"Marse Chan," said the darky," he's Marse Channin' — my young marster; an' dem places — dis one's Weall's an' de one back dyar wid de rock gatepos's is ole Cun' l Chahmb' lins. Dey don' nobody live dyar now, 'cep' niggers. Arfter de war some one or nurr bought our place, but his name done kind o' slipped me. I nuver hearn on 'im befo'; I think dey's half-strainers. I don' ax none on' em no odds. I lives down de road heah, a little piece, an I jes' steps down of a evenin' and looks arfter de graves."⁽¹⁵⁾

この後、マース・チャンの話を求められたサムは、引用原典の *Americans in Fiction Series* 版で約34頁にわたって語り続け、その間作者はまったく言葉をはさんでいない。作者の説明の他の文と、彼がサムに質問している個所を除いて、すべて黒人の英語であって、まさに vernacular そのものである。

サムの話によると、彼の少年時代、マース・チャン、すなわちチャニング坊ちゃんの世話係を命じられ、以来、彼の body-servant として、生活を共にし、南北戦争には共に従軍した。サムはつねにマース・チャンと行動を同じくし、戦傷を受けて生命を落す主人の最後を看取るのも彼である。

I jumped up an' run over de bank, an' dyar, wid a whole lot o' dead men, an' some not dead yit, under one o' de guns wid de fleg still in he han', an' tu'n 'im over an' call 'im, 'Marse Chan!' but 'twan' no use, he wuz done gone home, sho' 'nuff. I pick 'im up in my arms wid de fleg—still in he han's, and toted 'im back jes' like I did dat day when he wuz a baby, an' old marster gin 'im to me in my arms, an' sez he could tus' me, an' tell me to tek keer on 'im long ez he lived.⁽¹⁶⁾ ...

味方の屍を乗り越え、愛する主人のものに走り寄り、fleg（軍旗）を握っている彼を抱き上げて運ぶという、まさに body-servant の面目躍如である。この場面は、「マース・チャン」のなかでもっとも印象に残る個所であるが、それは、作者あるいは誰か他の人間が間接的に物語るのではなく、黒人のサム(17)の口から直接、彼自身の言葉で語られているからであろう。vernacularism が効果的に用いられている作品の好例である。

作者がマース・チャンの話聞いたのは、1872年の秋であった、と作品の冒頭に書かれているが、サムの英語には、今日の黒人英語にみられる特色が顕著である。たとえば、黒人英語の発音の特色の一つとして、本来 [r] 音がないところへこれが入ることがある。単語でいえば marster, arfter などがそれで、master, after が本来である。[a:] が [a:] となるのは南部方言の発音に一般的であるが、これにさらに [r] が加わるわけである。arfter は arter と綴られることもあるが、これは [f] が発音に現われないことを示す。筆者が耳にした例では、arfter のはじめの発音が [a:] よりは [ɔ:] に近く、[f] が無く、-ter の部分が、[tuh] のように響く発音があった。この発音は、ヴァージニア州のリッチモンドとウィリアムズバーグの間にある小さな田舎町クイントン (Quinton) で聞いたものであるが、arfter が [ɔ:rtuh] と発音されるのは一般的ではないであろう。同じヴァージニア州でも、リッチモンド、シャーロットヴィル (Charlottesville) やウェインズボロ (Waynesboro) などではほとんど聞かないし、テネシー、ミシシッピ、ルイジアナのような南部の他州でも聞かなかった。これに対して、arfter を綴りそのまま [a:rftə] のように発音する例は各所にある。ページの作品には God が Gord と綴られている例がみられるが、[gord] という発音は今日南部でしばしば耳にする。

黒人英語の他の特色として、take が tek, first が fust と綴られるように、二重母音が短母音化したり、長母音が短母音化する傾向を挙げることができるが、両者とも「マース・チャン」にみられる。

また、after において [f] が発音されないように、単語の一部の音が発音されないことも、黒人英語の発音に特徴的にみられることである。これは、語頭、語中、語尾いずれにも生ずる現象である。'im (←him), gi'n (←given), jes' (←just), han' (←hand) などがそれで、すべて先に挙げたマース・チャン戦死の場面にあるものだが、これらもまた、現在南部の黒人の発音に現われることがある。筆者は、gi'n と jes' を同時に聞く機会があった。それはリッチモンドでの経験だが、あるファースト・フーズ店のカウンターで代金を支払ったとき、釣銭を受け取っていないように思ったので、「釣銭は？」とたずねたのに対して、発音記号で書くと [a: dʒes giŋ yə]

のような答えが返ってきたのである。単語を並べれば、I jes' gi'n you となるのだろう。黒人サムが話したのが1872年のこと、それから一世紀以上経過してなお同じ発音が聞けるということは、大変興味深く、黒人の言語伝統の強さを感じる。もっとも、単語の一部が発音されないのは、南部の白人にも認められる特色であるし、南部以外でも耳にすることを付け加えておかねばならない。

これとは逆に、今日南部でよく目にしたり耳にしたりする表現でありながら、南部文学初期にはあまりない表現がある。その代表例は you all の二人称複数としての使用例である。you all は you-all, y'all, yawl などと綴られ〔ju: l〕,〔jɔ: l〕と発音される（筆者が聞いたのは後者が多い）が、この表現の起源については未だ定説がなく、⁽¹⁸⁾ エリザベス朝英語の you all がもとで、南部で二人だけの場合にも用いられるようになったとする説や、アフリカ諸語が起源であるという説がある。もし、前者であれば、植民地時代にイギリス人入植者によって持ち込まれた可能性があるし、後者であるならば、黒人がその運び手と考えられる。いずれにしても、この表現は、シムズやページなどの作家の作品にみられてしかるべきであろう。たとえば、『イエマシー族』におけるハリソンやヘクターの英語に you all が用いられてよい。ところが、you all という表現自体が数少ないし、用いられている場合でも、相手が三人であったり、不特定多数であったりする。you all よりも all of you が多い。これはシムズの他の作品にもいえることであるし、ページについても同様である。

黒人英語では単語の綴りや動詞の活用がきわめて自由である。「マース・チャン」から一、二挙げてみると、たとえば He was caught after a while. が He wuz cotched arfter a while. ⁽¹⁹⁾ となったり、She ought to have “taken a stick and knocked Marse Bob's head spang off.” が She ought to have “tooken a stick and knocked Marse Bob's head spang off.” ⁽²⁰⁾ となったりする。cotched はもちろん caught が正しいのであるが、caught が caughted となり、さらに方言として cotched と変る。この綴りは ketched となることもある。taken が tooken となっているが、藤井健三氏によると、take の方言活用には、take—tuck—tuck, take—taken—taken, take—took—took, take—taked—taked, take—tooken—tooken, take—takened—takened の六通りがあるということであり、上に挙げた例は第五番目に相当する。最初の tuck はまた tuk ⁽²¹⁾ となることがあり、これまた「マース・チャン」にみられる。She ought to have の部分は地の文であるが、もしこれが会話の一部であるならば、おそらく have は hab と綴られるであろう。単語の綴りについては、contemptuous が discontemptuous となったり、necessity で十分なのに、needcessity という妙なスペリングになるなど、

きわめて自由であるし、人称代名詞でも in his hand となるべきところが in he hand と表わされたりする。このような語法は、文法規則の上では破格であっても、それが作品の独特の色合いを出すのに大きな役割を果たしていることも事実であって、これがアメリカ南部の文学の地方色豊かな特質を生み出しているのである。

注

1. *The Encyclopedia of Southern History*, ed. by David C. Roller & Robert W. Twyman, Louisiana State University Press, 1976, pp. 724—728.
2. 井出義光, 本間長世, 大橋健三郎編『アメリカの南部』(研究社, 1973), p. 213.
3. William Gilmore Simms, *The Yemassee*, ed. with introduction by Alexander Cowie, Hafner Library of Classics No. 26, p. 5.
4. *The Yemassee*, p. 324.
5. *Ibid.*, p. 311.
6. *Ibid.*, p. 373.
7. 藤井健三著『文学作品にみるアメリカ南部方言の語法』(三修社, 1984) 参照。
この書物は、南部文学の作品を中心に数多くの実例を挙げながら、黒人英語を含む南部方言について、発音・文法などの面から精緻な分析を加えたものであり、南部方言研究の資料として貴重である。本稿をまとめるに当り、筆者はこの文献を度々参照し、大変参考になった。
8. David C. Roller & Robert W Twyman, *op. cit.*, p. 564. 『言語』 Vol. 11, No. 2 (大修館, 1982), pp. 62—63.
9. *Black English ; A Seminar* ed. by Deborah Sears Harrison & Tom Trabasso Lawrence Erlbaum Associates, Publishers, 1976, p. 127.
10. *Ibid.*, p. 130.
11. *Ibid.*, p. 131.
12. *The Yemassee*, Hafner Library of Classics, p. 385, p. 388, p. 392 などを参照。
13. William Gilmore Simms, *Wigwam and the Cabin* (Americans in Fiction Series), The Gregg Press, 1968, pp. 13—14.
14. William Gilmore Simms, *Woodcraft* (Americans in Fiction Series), The Gregg Press, 1968, p. 65.
15. Thomas Nelson Page, *In Ole Virginia* (Americans in Fiction Series), The Gregg Press, 1968, pp. 3—4.
16. *Ibid.*, p. 34.
17. 藤井健三著, 前掲書, p. 263 以降を参照。
18. 同, p. 38, p. 39 を参照。
19. *In Ole Virginia*, The Gregg Press, p. 34.

20. *Ibid.*, p. 196.

21. 藤井健三著，前掲書， p. 7 を参照。